

古代倭国史の再構築

認識理論と科学的方法に則って

第Ⅱ章 水田稲作の伝播から学ぶ

「蝶の雑記帳 130-2」

第Ⅱ章 水田稲作の伝播から学ぶ	45
i. 穀物栽培開始から文明段階まで	45
ii. 珠江中流域で開始された稲作の中国北部への伝播	50
iii. 古代朝鮮半島での稲作	65
iv. 水田稲作の九州北岸への到来	67

第Ⅱ章 水田稲作の伝播から学ぶ

i. 穀物栽培開始から文明段階まで

穀類をはじめとする植物の栽培と動物の飼育によって人類の文明は画期的に発展したから、穀類の栽培がどのように進展し伝播したかを理解することは、歴史の研究にとって重要事である。一般に、人類が穀類の栽培を始めたのはおおざっぱに1万年余り前、と考えられている。Wikipedia に書かれていることをまとめてみると、ムギ類は、西アジア（地中海東岸部・メソポタミア・その北）を原産地とし、考古学的な調査によれば、約 BC8400 年ころには野生コムギが栽培されていたと推定されている（「農業の歴史」のところでは BC11000 年という数字が挙げられている）。東アジアでのアワとキビは、遼河流域や黄河下流域(河北省)で BC6000 年代に入ったころには栽培されていた痕跡が見つまっている（「キビ」のところでは BC10000 年ころという数字が挙げられている）。

イネの栽培については、考古学的な調査が長江中下流域でプラント・オパールを検出し水田跡を見つけて、およそ BC5000 年ころにはすでに行なわれていたと報告している。他方で、生物学的な DNA ゲノムの解析は、現代中国南端部の珠江中流域でイネの栽培が始まったという結論を導いており、それはおよそ1万年前ころと推定されている^(9,10)。その推定を、イネの遺伝子の変異形質を調べると東南アジアの栽培イネが長江流域のものよりも古いとする別の生物学的研究⁽¹¹⁾が支持する。

上の段落の要約は歯切れがわるいと思われるだろう。しかし、厳格に言えば、考古学的調査による方法では、穀類野生種の栽培が始まった時代の推定はゆるぎのないほど確定的ではないし、栽培と呼べる段階に至ったとする絶対年代の数字も精度が十分よいと断定できない、とわたしには思われる。

ムギ類については、西アジアの考古学的調査が古くから比較的学問

的水準の高かったヨーロッパの研究者によってなされ、現在ではデータが比較によってある程度校正できるほど増えていると推測され、穀類の中では最も信頼できる栽培化の歴史を提示している、と考えてよいのだろう。少し補足すれば、メソポタミアの北部では初期文化はBC6000年にさかのぼるとされている。それはムギの栽培が天水を利用できるメソポタミアの北部で始まったことを示しているのだろう。メソポタミア南部で農業が始まったのは遅れてBC5500年ころ、シュメール人の都市が出現したのはBC3500年ころのことである。

アワとキビについて、インターネットで探索していたら、Shinichiro Honda 名のホームページに論説「アワ、キビの起源」⁽¹²⁾があった。アワのDNA解析によると栽培地域が複数のクラスターに類別でき、アワ・キビは複数の地域で栽培化されたと考えるのが合理的らしい。本書が考えなければならないのは、朝鮮半島や日本列島のアワ・キビと同じ系列につながる中国華北の遺跡で見つかっている種類である。キビ栽培の痕跡は河北省の遺跡で見つかっており、おおよそBC8000年ころにさかのぼれるらしい。アワ・キビの栽培も、ムギの栽培化と似て、同じ地域で長い年月をかけて発展した、と考えられる。その論説⁽¹²⁾に書かれている穀類野生種についての次の文は有益である。

アワとキビは、乾燥と高温に強く、初夏に発芽して急激に成長し秋には稔実する。つまり、高温期に雨が降りそれ以外の時期は乾燥するステップ気候で有利である。もし低温期に雨が多く降る地中海性気候ならムギのほうが有利である。一年中雨が降る気候であれば、連続的に場所を占有できる多年生のイネ科植物が有利である。

この文章は、ムギが西アジアで、アワ・キビが遼河・黄河流域で栽培化されるようになった理由を説明している。あとの考察で役立つだろう。

これに対しイネについては、考古学的なアプローチによって長江中

下流域がおそらく栽培起源地とする説と、生物学的アプローチによる研究^(9,10)によって珠江中流域でおおよそ1万年前ころ始まったとする説との二つが対立しているのである。後者の論文は2012年に発表されたが、今でも（インターネットで検索すれば一目瞭然だが）イネ栽培の起源地を長江中下流域とする歴史書や考古学書が圧倒的に多い。しかし2016年にその論文に気づいて、イネの栽培は野生イネの実の採集から始まるのだから、野生イネと栽培イネを広域から集めて、可能なかぎり多くのDNAゲノム・データを解析して遺伝子の近縁関係を系統づけて整理したら、珠江中流域の野生イネに行きついたとする論文⁽⁹⁾の結論は重い、とわたしは判断した⁽¹³⁾。さらに前著⁽¹⁴⁾で、珠江流域と長江流域の気温差まで考慮に入れると、イネの栽培起源地が珠江中流域である蓋然性がいっそう高まることを論証し、そこからの伝播を考察した。

この判断が正しいことが、Hondaのホームページの論説「イネの起源1」と「稲の起源2」⁽¹⁵⁾で論証されている。Hondaは、栽培イネの起源地が珠江中流域だということを予想していたという。長くなるが、その論旨をたどってみよう。

そもそも栽培植物の原産地には、その原種となる野生型が存在することが前提である。野生原種が存在しなければ栽培型が生じるはずがない。野生イネのルフィポゴンは、長江流域には生息しておらず、分布域の北限は珠江流域である。そして、新石器時代初期の古い稲作の考古学的な証拠が確認されているのは長江流域のみであり、野生原種のルフィポゴンが存在しかつ長江と距離的にもっとも近いのは珠江流域である。だから、イネの起源地としてもっとも可能性が高いのは珠江流域だろうと思っていた。

1万年前は現在より気温が3~4℃高く、長江流域まで野生イネの分布が広がっていたという主張もある。しかし、コムギの栽培化の例では、野生コムギの利用が始まってから、栽培型があらわれるまでに1000年以上を要している。オオムギでは1500年以上、

黄河流域のアワでは 4000 年もの時間がかかったと考えられている。栽培型があらわれるには、収穫する・捨てる・種播きすることを、1000 年以上も続けなければならない。だから、栽培イネの起源地は、ルフィポゴン（野生種）が 1000 年以上も安定して大群落を形成できるような場所でなければならない。もともと気候的にルフィポゴンが生息できない長江流域が、すぐにそのような場所に変わるという想定には無理がある。……

インディカが生まれた過程は、パンコムギが生まれた過程とよく似ている。パンコムギが、エンマーコムギ（栽培種）とタルホコムギ（野生種）との交雑によって生じたように、インディカもジャポニカ（栽培種）と 1 年生ルフィポゴン（野生種）との交雑によって生じたにちがいないと思っていた。

力強い論証である。これに反論するのはむずかしい。イネ栽培化の起源地を長江中下流域とする説は、珠江中流域とする新しい自然科学的知見に席を譲るほかない。そうすると、イネ栽培化の起源地を長江中下流域として構築されてきたこれまでの考古学や歴史学の議論は、修正をまぬがれない。

イネも、野生種の実の採集から始まる栽培化に、ムギやアワ・キビと同じように長い年月がかかったのである。異なるのは、ムギやアワ・キビが野生種の自生地域でメソポタミア文明とか遼河・黄河文明とか呼ばれる文明の段階に達したのとは異なり、イネは栽培起源地から移動して緯度が高くより冷温な長江流域まで伝播し、長江文明と呼ばれるような文明段階に達したという点である。

以上の記述は少し錯綜している。概要を整理しなおせば、人類が穀類を栽培し始めたのはおおざっぱに 1 万年前ころで、農業と呼べる段階に進むのに 2000 年くらいかかって、BC6000 年～BC5000 年ころ古代文明と呼べるような段階に達したのである。それがさらに文字を使用す

るほどの都市国家の段階に進むのにも二・三千年近くの年月がかかった。くわしく言えば、ムギを栽培したメソポタミアで BC3500 年ころ、アワ・キビを栽培した黄河・遼河流域で BC2000 年ころ（「夏」の出現）、伝来したイネを栽培した長江流域ではおおそ BC1000 年ころ（「楚」の出現）だったということになる。野生穀類の実を採集し始め、栽培種に改良して植えつける農業段階に至るまでにも、さらに小国家の形成に至るまでにも、一千年単位で数えるほど年月がかかったということである。

書かれた歴史時代を考えてみよう。『史記』などの史書に書かれた記録によると、アワ・キビを主に栽培した黄河流域では、BC2000 年ころ夏王朝ができたとされている。それは、シュメール人の都市国家に相当するだろう。すると、文明の進展度はメソポタミアよりも少し遅れていたと判断してよいだろう。史書を見るかぎり、長江中下流域の歴史時代は、黄河流域での古代国家形成から遅れた。その理由は、水田栽培を主とする稲作が開墾・灌漑などアワ・ムギよりも強度の労働集中を必要とし、広い地域に稲作農業が普及するのにより年月を要するからだろうか。あるいは、遠い南の温暖な珠江流域から少し冷温な北の長江流域に長い年月がかかって伝播したことに一因があるのだろうか。

これらのことは、水田稲作を主産業とする日本の古代史研究においても銘記されなければならない。重要なのは、イネの植えつけを始めても栽培者の生活が安定するようになるまで、栽培地を広げ、有効な栽培方法に習熟し、品種が向上するのにも長い年月を必要とする、ということである。収穫量が増加し養える人の数が増えるようになって、栽培地域を拡大するには、開墾して水平な水田をつくり灌漑水路を築くなど手間のかかる作業が必要で、人数が増えるには一世代を待たなければならないからである。さらに、人口が増え、栽培規模が大きくなって農業生産高が増加し、そのほかの多種多様な諸生産物も生産するのに

分業が必要なほどの段階に至るのにも長い年月がかかったのである。そういう段階に至ってはじめて、首長のいる小地域共同体への移行が始まり、やがて王が統率する小国家という組織が生まれたのである。

これを中国の稲作領域に当てはめて考えてみよう。黄河流域の国々よりも南側に位置する楚^その国は、『史記』「楚世家」に周から子爵に封じられたと書かれている BC1000 年ころには、首長制国家の段階に進んでいたとしてよいだろう。楚の発祥の地は長江下流域（現在の鎮江^{ちんこう}市あたり）であったと考えられており、のちのちまで黄河流域の他の国々から異質と見られた。発祥の地が長江下流域だったということから、楚は稲作農業を基盤とし、黄河流域の他の国々とは民族的にも異質であったとしてよいだろう。のちに楚は北の淮河^{わいが}流域まで版図におさめるが、淮河流域が同じ稲作民で文化的に同質だったことがそれを助けた、と考えることができる。このことはうしろの節で議論する。あとでも論じるように、イネは南の珠江中流域から長い年月をかけて北上し、杭州湾南岸の河姆渡^{かぼと}遺跡で BC5000 年のころには相当に高度な水田稲作を行っていた。鎮江はそこからそれほど遠くないので、そのころには鎮江あたりもかなり高度な稲作をしていたと考えられる。それなのに、鎮江周辺から北方に拡大して初期国家が建設されるまで 4000 年近くかかったことになる。かなり進んだ稲作農業の地域でも、政治体制まで整った国家の段階に進むのに長い年月がかかったということである。

このことは、日本列島で稲作の伝来した九州北部から（長江下流域ほど広大ではないとしても）かなりの距離にある近畿地方まで水田稲作が伝播しそこに王権国家ができるまでを、現行の日本古代史パラダイムを前提する考古学者と歴史学者はあまりにも短期間と想定しているのではないか、という疑問をいだかせる。

ii. 珠江中流域で開始された稲作の中国北部への伝播

この第 ii 節と次の第 iii 節では、『稲はどこから来たか 気候地理

学的な推論』⁽¹⁴⁾でした議論を要約して語る。その著作では、論拠となる多くの参考文献を挙げながら考察した。重要な図を引用し、各地の温度・降雨量を比較するためのたくさんの図、また、独自の考え方の図も示してある。ここではそれらを一々再録することができないので、詳細はそちらを見ていただきたい。ただし、論旨を展開するのに最も肝心の図数点と表をあらたに作成しなおしたのでそれを示す。

人類の穀類栽培がおおよそ 1 万年前に始まったことに、古気候学や地質学など現代の自然科学的な研究が信頼に足る理由を提示している。その理由とは、最後の氷河期が終わり地表の気温が上昇したことである。雑誌「Science」の論文⁽¹⁶⁾に最終氷河期以降の気温変動を推定したグラフが示されている。それによれば、おおよそ BC8000 年～BC3000 年ころの地表の年間平均気温が、1961 年～1990 年のあいだの平均気温を基準にしておよそ $+0.4^{\circ}\text{C}$ 程度高かった（ $+0.2^{\circ}\text{C} \sim +0.6^{\circ}\text{C}$ の範囲で変動）。この温暖な気候が、メソポタミア地域でムギ、遼河・黄河流域でアワ・キビ、珠江中流域でイネの栽培開始をもたらしたのである。

最終氷河期以後の気候に関連して、もう一つ重要な海水面の高さが地質学的調査によって推定されている。最終氷河期の最寒冷期約 2.1 万年前から現代までの海水面の高さを、Wikipedia の「海水準変動」⁽¹⁷⁾が示すグラフで知ることができる。現代にくらべて海水準は、約 2.1 万年前ころおよそ 120m 低く、BC8000 年ころには 50m くらい低く、BC3000 年ころにおおよそ現代の海水準に達したと推定されている。この海面上昇は、地球規模の平均気温の約 $+0.4^{\circ}\text{C}$ 前後への上昇によって、高緯度地域の氷河が融解してもたらされたのである。

ところで、1970 年以降文化人類学者が、中国雲南省一長江流域・台湾―日本の南西部にかけての半月弧で生活文化の多くの要素が共通す

ることを根拠に、照葉樹林文化論を展開し今世紀になっても議論は続いている。その文化論は稲作の起源地の議論にまで波及し、雲南を稲作起源地とする説まで出された（この説は論文^(9,10)でも一応言及され、前著⁽¹⁴⁾はこの文化論を批判的に検証した）。ところがその後、BC5000 年ころの河姆渡遺跡などの考古学的発見に基づいて、稲作起源地は長江中下流域とする説が有力となった。しかしすでに述べたように、発見されている考古学的遺跡だけからの立論は十分な証拠とは言えない。

これに対し、生物学的な遺伝子解析は、遺伝形質の関連を調べることができ、遺伝形質の分岐の年代まで推定する方法をもっている。2012 年に発表された Huang 倉田 et al. の論文^(9,10)が、東アジア各地の野生イネと栽培イネの大量の DNA ゲノムを解析することによって、栽培が珠江中流域で始まった、と結論した。上で述べたように、この生物学的な結論を採用すべきである。そこで本書は、先ほど要約した大局的な観点に立って、およそ 1 万年前ころに野生イネの実の採集が現代中国南端部の珠江中流域で始まったとし、そこからの伝播を考察することにしてしよう。

この考察で気候に注目するのは、気候が栽培植物である稲の伝播に最も大きく影響するからである（動物の気候耐性に劣る）。それなのに不可解なことに、考古学者や歴史学者は稲の伝播を議論するときにほとんど気候を考慮してこなかった。天明の大飢饉が教えるように冷害は稲作農民にとって死活的問題であった。近年でも 1913 年と 1993 年の夏季の冷温が東北地方の稲作に大凶作をもたらした。その二つの年に、稲作期の平均気温が 2.2°C と 2.0°C 下がったせいで、米の作況指数がそれぞれ 48% と 57% になったという⁽¹⁸⁾。ある地域のイネの生育期の平均気温が例年よりも 2°C 程度下がるとそれほどの被害をもたらすのである。そして、歴史上あった渇水による飢饉が、水稻栽培では生育期の降雨量も重要であることを教える。だから、東アジアで主流だった水田稲

作が東アジアの各地にどういう経路をたどって伝播したかを考察するとき、生育期の気温と降雨量は、きわめて重要なのである。

Huang 倉田 et al. の論文^(9,10)は、栽培イネがジャポニカ種とインディカ種に大別されることについて、重要なことを指摘している。遺伝形質の分岐を調べた結果、珠江流域で最初に栽培されたイネはジャポニカ種で、それが南方の東南アジアなど各地域に行ったとき現地の野生イネとの交雑によってインディカ種が生じた、というのである。珠江流域から北上を始めた栽培イネはジャポニカ種だっただろうと考えられ、現代の中国・日本・朝鮮半島での栽培イネが主としてジャポニカ種であることと調和する（インディカ種の北上はあとのことと考えられる）。

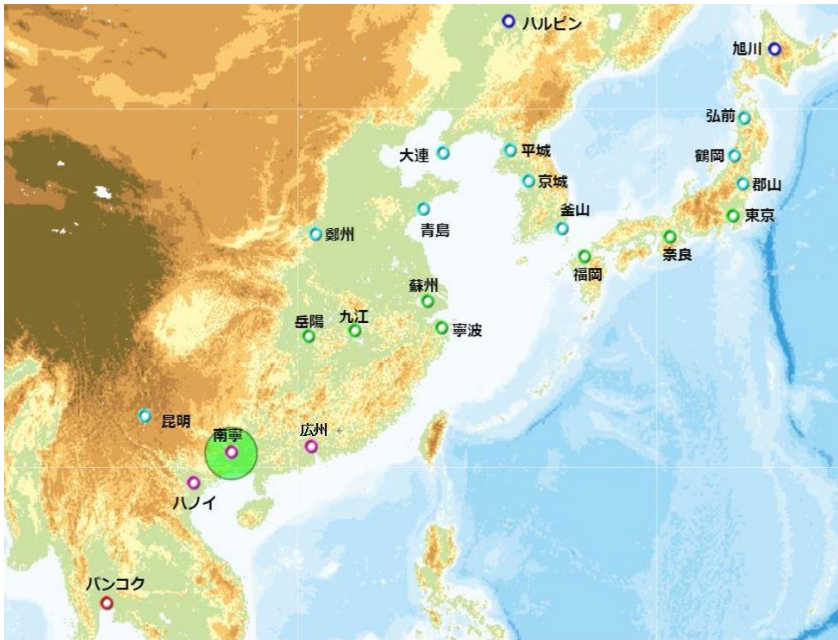
このことは、珠江流域から高緯度の北方への稲の伝播において重要である。すなわち、稲は北上するにつれて低下する冷温に適応しなければならなかったのである。植物の気温適応は長い年月を必要とする。上で触れたように中国で稲作文明がアワ・キビ栽培文明よりも年代的に遅れた原因の一つは、この冷温適応にあったと考えることができる。ここで、第二次大戦以前に日本の稲を気温の高い台湾へもちこんだとき成功しなかった⁽¹¹⁾ことにも留意することが有益である。気温の低い地域に適応した稲は、逆に気温の高い南方へ再移動する場合にも容易ではなかったのである。だから、イネの栽培が長江流域で始まったとする想定は、よく考えれば、気温の高い南方への伝播について問題をはらんでいたのである（その先には、東南アジアの野生イネとの交雑というもっと困難な問題がひかえていた）。

さて、このように要点をおさえた上で、栽培稲が珠江流域からどのように伝播していったか気候を考慮に入れながら具体的に考察しよう。ただし、地域ごとの古代の気候を精度よく知ることはできない。そこで、前著⁽¹⁴⁾でしたように、現代の各地の気候から推定するという手法を用いる。それは、気温がおおよそ安定していた BC8000 年から BC3000 年

にかけて、それほど距離の差のない南北の土地の気候差を決めたのは主に緯度の差である、という想定に基づく。とくに BC5000 年ころからは海水準がおおよそ現代の水準に近づいて海流の流れが現代に近づき、（天体間の相互作用による長期的影響を度外視すれば）気候を決定する主要因は大気と海洋だったから、この想定は一定の有効性をもつだろう。そのあと、BC3000 年ころ 0.4℃程度あった地表の年間平均気温は、徐々に低下して西暦紀元 0 年ころほぼ 0℃まで下がった、と推定されている。この低温化は人の世代交代の期間に比べればゆるやかで、長期間にわたる影響は無視できないとしても、人間が^{もみ}穀を運んで移住するのを大きく妨げることはなかった、と考えることを許すだろう。そして、直近の 2000 年間は過去 1 万年間で最も気温低下を記録した時代であるが、日本の歴史書を見ても、南北の気候差は主に緯度の差に依っていたと推定される。こういうわけで、長江流域に至って稲作文明が一定の水準に達した以後、緯度の異なる南北の地点の古代の気候差を、現代の気候データで推定するのは有効である、と仮定しよう。

ただ、野生イネの実を採集するようになった BC10000 年ころには海面が-50m 余り低く、珠江流域からヴェトナムにかけての地域でイネの栽培が始まったばかりのころにも海水準はまだ低く、海岸線が現代よりも張り出していて、氷河域の広さや海岸線の変化が気候に相当に影響しただろう。そういう古い時代にさかのぼるほど、緯度の差から気温の差を推定する方法は切れ味が悪くなる。前著⁽¹⁴⁾では、そういう時期まで踏みこんで考察したが、本書ではそれは省略しよう。

図Ⅱ.1 に、伝播の状況を地理的にとらえるための東アジア広域地図を示す。図Ⅱ.1 には伝播経路として地形的に要所となる地点を示してある（河川が描けていないけれど）。56 ページの表 1 には、それぞれの地点での月別平均気温を、緯度の低いインドシナ半島から北上し気温の低くなる順に示してある。気候データは <https://www.travel-zentech.jp>



図Ⅱ.1 稲の栽培起源地と伝播を考えるために

から得た（気候データは都市でなければ得られない）。引用元は中国気象局・日本気象庁などのデータで、*印のついていない地点のデータは1981年から2010年まで30年間の平均値である（*印のついたデータはそれと異なる30年間の月別平均気温である。寧波のデータは1971年～2000年）。次ページ表1を見れば、南北の気温差が稲の生育にとって無視できないほど大きいことが分かる。これらのデータは、必ずしも古代の気候、ことに中期短期の気候変動期の気温や降水量を正確には教えてくれないだろう（データには、最近の大都市の気温が田園地域よりも高めなことや、近年の地球規模の温度上昇の影響も含まれているだろう。蘇州のデータは1961年～1990年で少し低めである）。しかし、栽培稲の移動における相対的な気温差を知るには有効だと考えられる。

上に書いた注意書きを念頭に置いて、表1の気温データに基づいて

考察を始めよう。前著⁽¹⁴⁾では、伝播の経路と考えられる二地点の気候を、月別の平均最高・最低気温と降雨量のグラフで比較して議論した。本書に示さないものについてはそちらを見てほしい。

稲の栽培起源地珠江中流域は図Ⅱ.1 の緑色の円で囲んだところで、その中心都市が南寧である。そこからの栽培稲の北上を考えるのに、

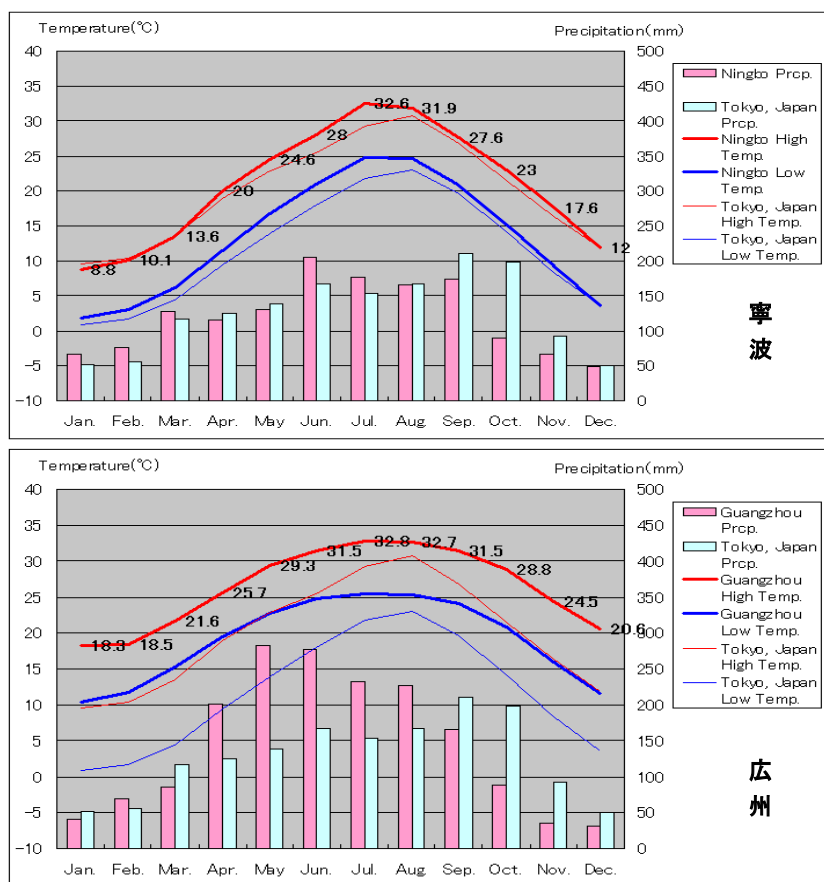
表 1 東アジア各地の月別平均気温(°C)							
都市	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月
ハルビン*	7.7	15.4	21.4	23.3	21.8	15.4	6.8
旭川	5.6	11.8	16.5	20.2	21.1	15.9	9.2
弘前	8.5	13.8	17.9	21.7	23.5	18.9	12.5
鶴岡	10.3	15.4	19.7	23.3	25.1	20.8	14.8
郡山	10.3	15.6	19.4	22.9	24.4	20.1	14.1
東京	13.9	18.2	21.4	25.0	26.4	22.8	17.5
奈良	13.4	18.0	21.9	25.8	26.9	22.9	16.6
福岡	15.1	19.4	23.0	27.2	28.1	24.4	19.2
平城*	11.0	16.8	21.6	24.7	24.7	19.5	12.5
京城	12.5	17.8	22.2	24.9	25.7	21.2	14.8
釜山	13.6	17.5	20.7	24.1	25.9	22.3	17.6
大連	10.6	16.4	20.7	23.7	24.4	20.8	14.2
青島	11.3	16.7	20.5	24.4	25.4	22.0	16.5
鄭州	16.0	21.5	26.0	27.1	25.8	21.2	15.5
蘇州*	14.2	19.2	23.4	27.8	27.7	23.6	18.3
寧波*	15.2	20.2	24.0	28.1	27.8	23.7	18.7
南寧	22.5	25.9	27.8	28.4	28.3	26.8	23.6
ハノイ*	24.2	27.9	29.2	29.5	28.8	27.8	25.3
バンコク	30.5	29.9	29.5	29.0	28.8	28.3	28.1

表 2 で、珠江と長江の中下流域の月別平均気温を比較して、二つの大河流域の気温の差をおさえておくことが重要である。珠江中流の南寧と河口の広州は北緯 22.83 度あたりに位置し、Google map を見れば珠江中下流域が湿潤で稲作に適していることが分かる。中流域で始まったイネの栽培が下流域に達するのに、緯度の異なる場合ほど長い年月がかからなかったと考えてよいだろう。長江中下流域にある岳陽・九江・寧波はそれぞれ北緯 29.37 度・29.66 度・29.90 度に位置する。表 2 は、長江の中下流域と珠江の中下流域のそれぞれで、稲作時期の月別平均気温がおおよそ等しいことを示す（広州のデータは 1971 年～2000 年の平均値）。だから稲は、南方で西から東へ流れる珠江流域から北方で西から東へ流れる長江流域へ北上した、とすることができる。

表 2 珠江・長江流域各地の月別平均気温(℃)							
都市	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月
寧波*	15.2	20.2	24.0	28.1	27.8	23.7	18.7
九江 [#]	17.5	22.2	25.4	28.8	28.1	24.3	19.0
岳陽 [#]	18	23	26	29	28	24	18
昆明	17.3	19.2	20.3	20.2	19.9	18.3	16.0
広州*	22.4	25.8	27.8	28.9	28.8	27.5	24.7
南寧	22.5	25.9	27.8	28.4	28.3	26.8	23.6

北上する前に、照葉樹林文化論が想定していた雲南省が初期稲作地であったとする主張を検討しておこう。表 2 に雲南省省都昆明の月別平均気温を加えてあるが、それを見れば、雲南省が珠江中下流域や長江中下流域よりも稲作時期の気温がうんと低いことが判明する。前著⁽¹⁴⁾でも論じたように、照葉樹林文化論は一定の意味をもつのだけでも、雲南省での稲作はかなり遅い年代に始まったと考えなければならない。その論者たちは、地図Ⅱ.1 が示すように雲南省が高地にあって夏季も冷温であることに注意が足りなかったのである。

それではいよいよ、栽培稲の珠江流域から長江流域への北上を考えよう。表 1 と表 2 の月別平均気温を見ると、二つの領域の気温差はそれほど大きくはないと思われるだろう。しかしそれではなぜ、おおよそ BC8000 年ころに稲の栽培が始まったと考えられているのに、BC5000 年ころまで長江中下流域で稲作遺跡が見つからないのだろうか。稲作は長江流域に達するのに 3000 年もかかったのである。すでに述べたよ

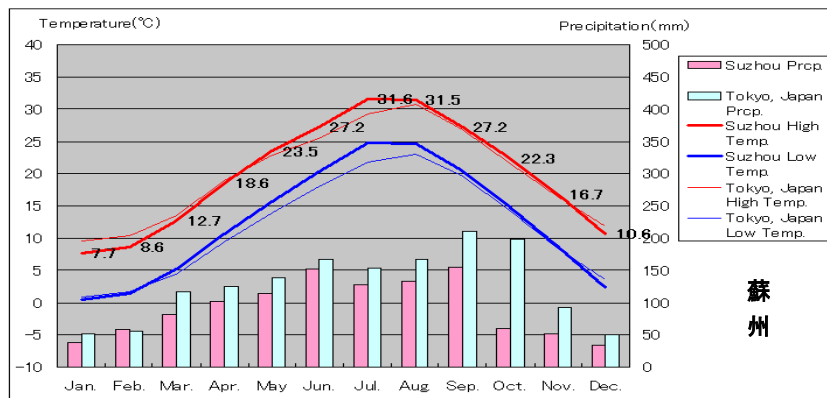
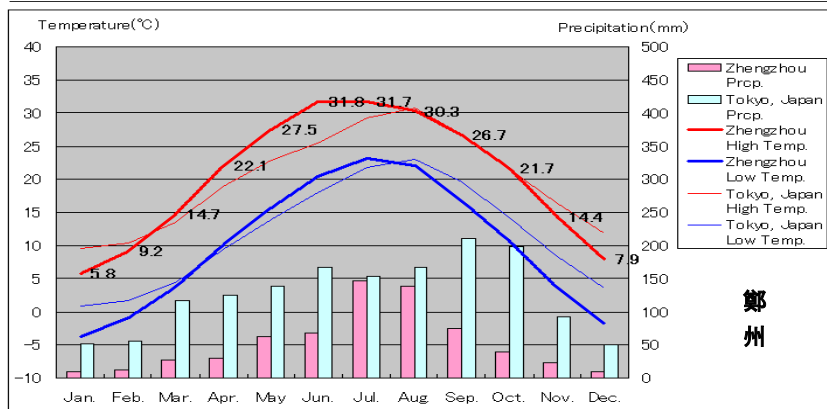
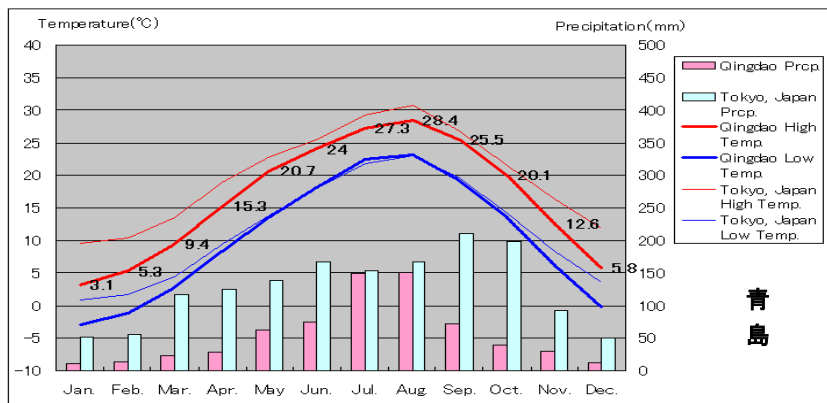


図Ⅱ.2 広州と寧波の月別最高最低気温と降水量(左の赤棒) 引用

うに稲作が大きな労働力を必要とし耕作者が増えて伝播するのに年月がかかるということがあるのだけれども、気候差はやはり大きな要因だったと考えるべきである。月別平均の最高気温と最低気温をくらべればそれが判る。図II.2（前著⁽¹⁴⁾の図修正）に、広州と寧波のそれを示す（グラフに加えられている東京の気温と降雨量が比較を助ける）。

広州と寧波の気温を比較すると、目立つのは、平均最高気温が、広州で6・7・8・9月のあいだずっと30℃を超えるのに対し、寧波では30℃を上まわるのは7・8月だけという点である。同様に、平均最低気温も、広州で6～9月のあいだほぼ25℃を保つのにに対し、寧波では7・8月しか25℃を超えない。5・6・9月については、広州の平均最高気温が29.3・31.5・31.5℃あるのに、寧波のそれは24.6・28.0・27.6℃しかない。また、広州の平均最低気温が22.7・24.8・24.0℃あるのに、寧波のそれは16.7・21.8・20.8℃しかない。天水だけに頼るときには、広州の降雨量の多さも稲に有利だったはずである。亜熱帯に属す珠江流域と温帯に属す長江流域との気候差は明らかである。この気候差が珠江流域から北の長江流域への栽培稲の移動を遅らせた、と考えてよい。寧波の河姆渡遺跡がBC5000年ころのものだという理由を、このように理解することができる。図II.1の地形図は、広州あたりから北方の岳陽と九江へ伝播するのに山を越えれば平地が見つかり、稲を誘導する二つの経路があったと推定することができる。他方、寧波へは海岸伝いに北上することができ移動に有利だったかもしれない。

図II.1は、長江流域に達した稲が北に広がる広大な平野へ伝播する可能性を示す。しかし、気候差はやはり北進を容易なものとはしなかった。そのことを、図II.3（前著⁽¹⁴⁾の図修正）で、長江流域の蘇州と黄河流域の鄭州^{ていしゅう}との気候差をくらべて考えよう。平均最高気温について、稲の栽培期間全体で鄭州は蘇州と同じ程度の条件をもっている。ところが平均最低気温については、7・8月で2度程度低く23℃を超えない。



図Ⅱ.3 中国北部の月別最高最低気温と降水量(左の赤棒) 引用

この夜間の低温は稲が黄河流域に到達するのを遅らせたと考えられる。鄭州には気温以外にも問題がある。雨が、最高温期の7・8月には蘇州より多いけれども、5・6月には蘇州の半分程度しか降らない。黄河流域では、夜間の低温をふせぐ効果のある水は灌漑施設が十分でなければ不足がちになっただろう。実際、考古学的調査と歴史書は、黄河流域では稲が主要な穀類となることがむずかしかったことを教える。

稲にとって、黄河流域には、気候上の条件のほかに、競争相手となる栽培穀物がすでにいたのである。比較して冷温で雨の少ない黄河以北で栽培の始まったアワとキビは、その気候下の黄河流域で古くから主要な穀物であった。その栽培を基盤として黄河文明は築かれた。比較的冷温で雨が降りすぎない気候を好むアワ・キビに対して、遅れて黄河流域にやってきた稲は、温暖で湿潤な気候を好むという気候上の問題からだけではなく、すでに築かれていたアワ・キビを栽培する社会によって従属的な栽培穀物としてしか受け入れられなかった。

のちに西方からムギがやって来て、^{せんせいしやう}陝西省の広大な平原から^{かんこくかん}函谷関を越えて^{ちゅうげん}中原に入ってきたときにも、黄河流域で稲が主役になることはなかった。冬季にムギが栽培できれば夏季に稲が主役になってもおかしくなかったけれども、そうはならなかった。ムギは耕作の面で、アワやキビと同じく、水を留めることができるように地面を水平にならす必要がない。この作業量の少なさは、耕作者に、気候的にも栽培に適さない稲よりもムギ・アワ・キビを選好させたと考えることができる。後世まで、ムギ・アワ・キビ作と稲作の境界線は、^{しんれい}陝西省の平原の南を区切る^{わいが}秦嶺山脈と黄河の南方を東流する淮河を結ぶ「秦嶺・淮河線」⁽¹⁹⁾にあった。

中国農業を大きく区分けするその「秦嶺・淮河線」は近代になって見出されたのだけれども、境界線の特徴づけるのは二つの気候条件であった。年間降雨量 1000mm と 1 月の平均気温 0℃とが、その境界線をほ

ぼ決めたのである。すなわち、夏季にあまり高温にならず湿潤すぎない気候を好むアワ・キビとその地域の冬季の気温と雨量に適合できた麦は、秦嶺・淮河線の北側で栽培され、夏季により温暖で湿潤な気候を好む稲は、秦嶺・淮河線の南側で栽培された。この詳細は、図Ⅱ.4に示す東アジアの農業地図⁽²⁰⁾で確認することができる。

本書では淮河流域の気候を示さなかったが、淮河中流域の^{わいなん}淮南市の気候が長江流域の蘇州に近いことを付記しておこう⁽¹⁴⁾。農業地図Ⅱ.4と



図Ⅱ.4 東アジアの農業地図 引用

ケッペン気候区分⁽²¹⁾をよく見ると、淮河流域の平地が稲作地帯であることを示し、淮河の流域では秦嶺・淮河線を図Ⅱ.4 の太い青線のように補正した方がよいことを教える。すなわちこの領域では、秦嶺・淮河線は淮河流域の平地よりも北にあるのである。稲作に基盤を置く楚国が淮河流域まで版図を広げたことはすでに触れた。楚の版図拡大は、北上する稲がつくっていく社会を政治の支配が遅れがちに追った事象である（BC1000 年ころは一つの画期だった）と考えることができる。

さて、今でもほとんどの日本の考古学者や歴史学者が、稲作は、山東半島やその北の遼東半島から朝鮮半島へ伝播したと想定し、さらに朝鮮半島から日本列島へ伝来したと判断し、それを前提して日本列島の古代史を議論している。この前提は十分に検討されているのだろうか。ここまでのアプローチを、中国北東部・朝鮮半島・日本列島の古代史と関係づけて考察することが必要である。

中国北東部→朝鮮半島伝播論を主導してきたグループの最近の 11 章からなる論文集⁽²²⁾が、山東半島と遼東半島での稲作の痕跡を考古学的に調査し報告している。その要点は次のようなものである。

山東半島の遺跡での調査は、ボーリングによって土壌をとりだし、イネのプラント・オパールを定量分析する方法で行なわれている。その結果、検出密度が日本で水田検出の目安とされる値を示す地層が見つかった。しかし、まだ検出するという調査段階であり、この調査以上の有力な稲作の証拠は示されていない。遼東半島では、イネの炭化果実が検出されていて、土器に残っていた穀類の圧痕の調査結果が報告されている。一つの遺跡では、アワ・キビのみだった状況から、イネ・ダイズ属・ウリ科などが加わる段階に進んだようだ。しかし、表を見ると、アワが 9 例（+アワの可能性 2 例）とキビが 5 例（+キビの可能性 1 例）なのに対し、イネは 1 例だけである。しかも、ダイズ類 4 例やウリ科 3 例などが含まれる時期で、イネは 1 例もなくアワ・キビがそれぞれ 79 例・25 例と圧倒的に多

い。遼東半島のもう一つの遺跡の土器の圧痕を調査した結果も似ている。イネの圧痕は、だいぶ遅い時期に 7 例見つかったが、キビが 69 例、アワが 54 例と圧倒的に多く、あとはダイズ属 2 例・マメ科 1 例・その他 7 例である。少し前の時期には、イネやムギ属は見つからずキビが 13 例でアワが 5 例でその他 3 例である。こちらでも、キビとアワが圧倒的に多い。

この考古学的調査結果は、鄭州のところで論じたことが山東半島でも遼東半島でも成り立つことをむしろ証拠立てている、と見える。

ひるがえって、黄河流域の鄭州を含むい^{ちゅうげん}ゆる中原での稲作の記録は、春秋時代までしかさかのぼれない⁽²³⁾。記録されていない稲作が部分的にあったとしても、また、十分ではないが考古学的調査からしても、BC1000 年をそれほどさかのぼれないと考えてよいだろう。だから、黄河文明の周縁部に位置しより冷温な山東半島で、BC1000 年をさかのぼる時代に、対岸の朝鮮半島へ稲をもちこむほど稲作が進んでいたとする想定⁽²²⁾は疑問である。

鄭州の気候が蘇州の気候よりも稲作に向いていないことはさっき見たばかりであるが、念のために、図Ⅱ.3 に追加してある青島の気候グラフによって、上述の考古学的調査の議論を検証しよう（青島は地図Ⅱ.1 で示すように山東半島の南側のつけねにある）。図Ⅱ.3 のグラフは、青島の気温が鄭州よりもさらに低く稲作に向いていないことを教える。青島の平均最高気温を鄭州と比較してみると、稲がまだ弱い育苗～枝分かれまでの 5・6 月に 6.8・7.8℃低く、幼穂形成・出穂・成熟期に当たる大事な 7・8・9 月に 4.4・1.9・1.2℃低い。平均最低気温については、出穂・成熟期の 8・9 月に青島が鄭州よりも高いが、枝分かれ～幼穂形成期 5・6・7 月に青島が鄭州より 1.9・2.2・0.7℃低い。そして、表 1 の示す大連の平均気温が 7・8・9 月に青島より 1.3・1.0・1.2℃低いことから分かるように（平均最高・最低気温をくらべても⁽¹⁴⁾）、遼東半島は

山東半島よりもさらに稲作に向かないのである。

直前の段落の議論と上の気候条件を客観的に判断すれば、BC1000 年ころにさかのぼると、山東半島や遼東半島では、生活基盤をアワ・キビの栽培においていて、稲の栽培はあったとしても部分的であり、朝鮮半島へ稲作を送り出すほどの段階には至っていなかった、と結論せざるをえない（くわしい議論は前著⁽¹⁴⁾）。つまり、日本の考古学者や歴史学者がしているように、稲作が BC1000 年よりもだいぶ前に山東半島や遼東半島から朝鮮半島へ伝播したとする前提は成立しがたい。

iii. 古代朝鮮半島での稲作

朝鮮半島ではどうだっただろうか。Wikipedia「稲作」で、朝鮮半島でイネを栽培するようになった年代を調べてみよう。2022 年に調べたときには⁽¹⁴⁾、— 遼東半島で約 3000 年前の炭化米が見つかったが、朝鮮半島ではそのころの稲作の痕跡は見つかっていない。水田稲作に関しては朝鮮南部では約 2500 年前の水田跡が松菊里遺跡などで見つかった（Wikipedia「松菊里遺跡」は BC850～300 年としていた）。研究者の甲元は、最古の稲作の痕跡とされる前七世紀の欣岩里遺跡のイネは陸稲の可能性が高いと指摘している — と書かれていたが、2024 年に見ると、— 無文土器時代前期にあたる平壤市南京里遺跡で発見されたイネが最古であるが、陸稲であった可能性が高いとされる。水田稲作に関しては朝鮮半島南部では、3100 年前の水田跡が慶尚南道蔚山・オクキョン遺跡から、2500 年前の水田跡が松菊里遺跡で見つかっている。— と変更されていた。インターネットでずいぶん探索したが、Wikipedia の記述はごく最近の文献を参照しているか疑問である。慶尚南道蔚山・オクキョン遺跡の水田跡が 3100 年前とするのは考古学的な編年に拠るものと思われ、絶対年代の記述が十分信頼できるか疑問である。これらの記述はむしろ、山東半島の場合と同じく、朝鮮半島の本格的な水田稲作を BC1000 年よりも前にさかのぼって想定することをためらわせる。

稲が朝鮮半島から日本列島へ伝わったとする考えは、穀類を栽培す

るようになった時代に文化は中国北東部→朝鮮半島→日本列島へ伝わったとする認識が、日韓の考古学者と歴史学者のあいだで共有されているからである⁽²⁴⁾。たとえば論文⁽²⁵⁾は、突帯文土器（無文土器）が中国東北地域から韓半島へ拡散し、およそ同じ時期の BC1000～BC825 年ころには日本列島にも出現するという考古学的知見を示す。ところが、論文⁽²⁶⁾は、韓半島南部から西日本への影響は突帯文の文様に限定されているとし、「突帯文土器文化は畑作を生活基盤としていた」と書いている。すると、この土器文化は水田稲作を基盤とする文化ではないだろう。むしろそのころ朝鮮半島でも、山東半島や遼東半島と同じくアワ・キビを主体とする生活だったと考えるのが合理的である。ところで Wikipedia は、無文土器について、朝鮮半島の青銅器時代の指標となる土器のことで、およそ紀元前一千年紀前半に現われ、北部では BC200 年代・南部では西暦紀元前後ころまで使われた、と書く。それを書いた人は、山東半島や遼東半島から突帯文土器（無文土器）が朝鮮半島へやってきた時代は BC1000 年よりもあと、と認識しているのである。この生活文化についての認識を整合的に受けとめれば、朝鮮半島への稲作伝来の時期が BC1000 年よりもっとさかのぼるとするのはむずかしい。

古代稲作の具体的なあり方をさらに調べなければならない。「朝鮮半島原始時代農耕集落の立地」という論文⁽²⁷⁾に、農耕遺跡の分布と、温かさと寒さの二つの指標で区分した朝鮮半島の気候図⁽²⁸⁾が比較してある。それを見ると、イネの炭化種子・圧痕の出土した遺跡のほとんどが温かくて寒すぎない南岸部（古代の弁韓地域と辰韓南部）と、冬に寒いけれども夏に温かい古代馬韓の黄海沿岸部に集中している。それよりも北に行くとしだいに、他の穀類にイネが混じる遺跡、つづいて他の穀類だけしかない遺跡へと変移していく。イネとアワ・キビの栽培地域が気候に左右されて分かれていたと知られる（高等学校の社会科資料で確認すれば現代までこの傾向は残っていて、古代よりも稲の作付けが広がったのは品種改

良のおかげだと判る)。このことは、図Ⅱ.4の農業地図を注意深く見ると理解できる。気候のせいで朝鮮半島南半にも、複雑だけれど秦嶺・淮河線に当たるものがあって、アワ・キビと稲の栽培が地域ごとに分かれたのである。現代でも稲作が古代の弁韓・馬韓・辰韓南部地域を中心に行なわれていることが、稲が冷温耐性を獲得してからも、朝鮮半島では稲の栽培で古代と根本的に異なる変化は起きなかった、と証言している。稲の伝来の問題は注意深く考察する必要があるのである。

以上をまとめれば、朝鮮半島への稲の伝来を BC1000 年よりも以前に想定するのはかなりむずかしく、誤差を許容して仮にさかのぼるとしても、稲作は冷温によって定着に手間取った、と考えるべきだろう。その稲作は、BC900 年ころ九州北岸で始まったほどの水田稲作の水準に達していただろうか。ただし、朝鮮半島の稲作が、青島・遼東半島のような北からではなく、黄海対岸でも淮河流域やその南から伝播したとすれば、話は少し変わるだろう。黄海に面した中国大陸側の人々は古くから対岸に陸地があることを知っていたから、そういう機会があったはずである。次の小節で見るように、朝鮮半島で栽培された稲が日本列島へ伝来した稲よりも多様な形質をもつことから、そういう伝播経路を考える必要があるだろう。

iv. 水田稲作の九州北岸への到来

こうして、稲の日本列島への伝播を問題にするときも、植物としての稲の生物学的性質を考えないわけにはいかない。佐藤洋一郎著『稲の日本史』⁽²⁹⁾の議論を見よう。現代の日・中・朝(朝鮮半島域)で栽培されている稲の品種の差異が一つの見通しを与えてくれる。長江下流域の河姆渡遺跡などの遺跡から出土した炭化米 20 粒はみなジャポニカだった(そのうち、2 粒が熱帯型で、残りは温帯型か熱帯型かの区別ができなかった)という。さらに、DNA 配列の SSR 領域にある特徴の一つ RM1 型は 8 種類に分類できるが、中・朝・日の在来品種 250 種を分析した結果、次の

ことが分かった： 中国には RM1 型 a～h の 8 種すべてがあり、RM1b 型が 60%以上で、RM1a 型がそれにつぐ； 朝鮮半島には RM1b 型をのぞく 7 種があり、RM1a 型が 60%以上である； 日本には RM1a 型・RM1b 型・RM1c 型の 3 種があり、RM1b 型がほぼ西日本側にかたより、RM1a 型は東北地方を含めた全域に分布する。

この結果に基づいて佐藤は、考古学者の多くが想定するようなイネの朝鮮半島経由だけでなく、もう一つ中国大陆から列島への直接ルートがあったと提起した。2001 年のことだが、考古学者は最近の論文でもこの見方に言及しない。しかし、この見解は開かれた議論にゆだねられ検討されるべきである。わたしは、RM1b 型が朝鮮半島にはなくて日本列島にあることから、RM1b 型は中国大陆から列島へ直接伝来したとする推定に合理性がある、と考える。

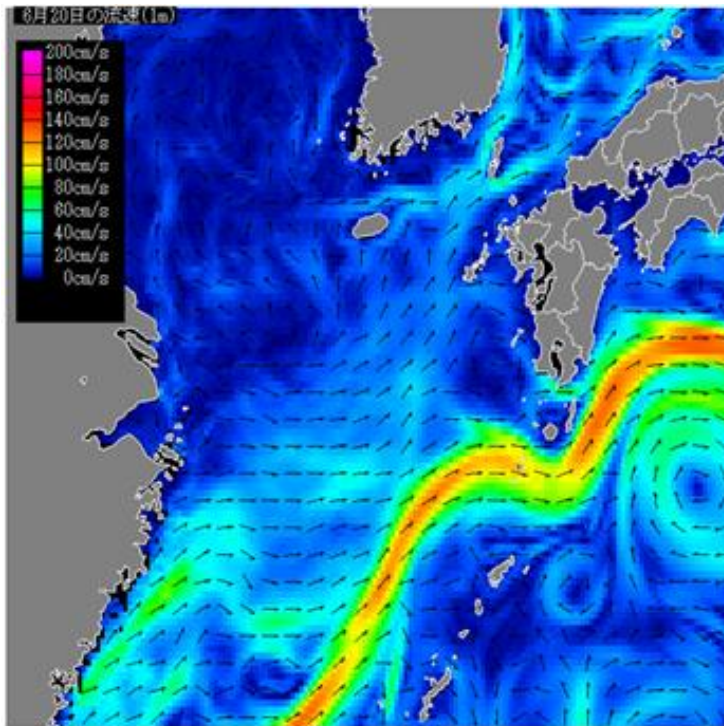
ここまで、稲作の日本列島への伝来を考察するための準備を長々としてきたが（詳細な議論は前著⁽¹⁴⁾）、それはしっかりした判断を下すために必要なことだった。

いよいよ、日本列島へ伝来した稲はどこから来たかという問いを考察しよう。最近の概説書である藤尾慎一郎著『日本の先史時代』⁽²⁵⁾が、水田稲作が九州北岸で開始されたことを明らかにしている。ここまでの考察から、上の問いは、考古学者と歴史学者の多くが想定しているように朝鮮半島南岸から海峡を渡ってきたか、それとも中国大陆のどこから東シナ海を渡ってきたかという問いに整理できる。

稲が中国大陆から海を渡って九州北岸へ来たと考える場合、最も有力な出発候補地は古く BC5000 年ころの区画された水田跡が見つかった長江下流域である。中でも代表的な河姆渡遺跡の出土物は、稲作を基盤とするかなり高度な文明の段階に至っていたことを教える。河姆渡遺跡は杭州湾南岸の寧波市郊外に位置し、4000 年かけて発展したその地域から BC900 年ころ九州北岸へ船で渡る条件は十分あった。杭州湾

の東には大小の島々が南北につらなり海に親しむ土地柄であり、寧波は古くから中国大陸で海外に開かれた北の港となった。地理と海流が、東シナ海を渡って日本列島へ至る最善の潮の流れを提供するからである⁽¹⁴⁾。図Ⅱ.5に示すように、杭州湾の東に出て東流する潮の流れに乗れば対馬海流に合流できて、そのまま、九州本島西岸のかなり沖合を北へ向かい五島列島の西側を通過し、東へ回りこんで九州北岸の沖へ導かれる⁽³⁰⁾。

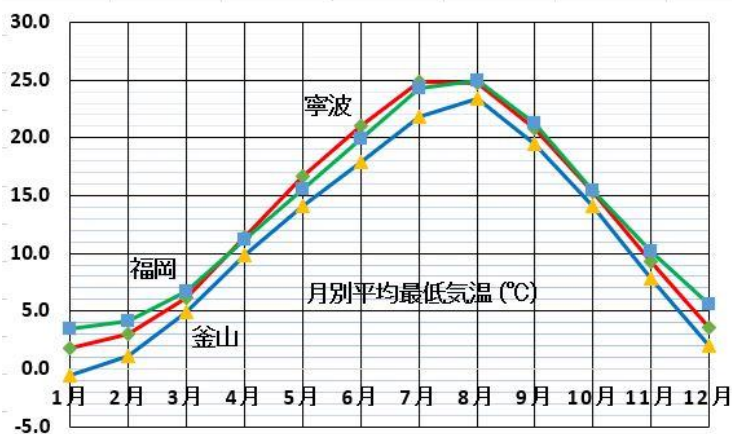
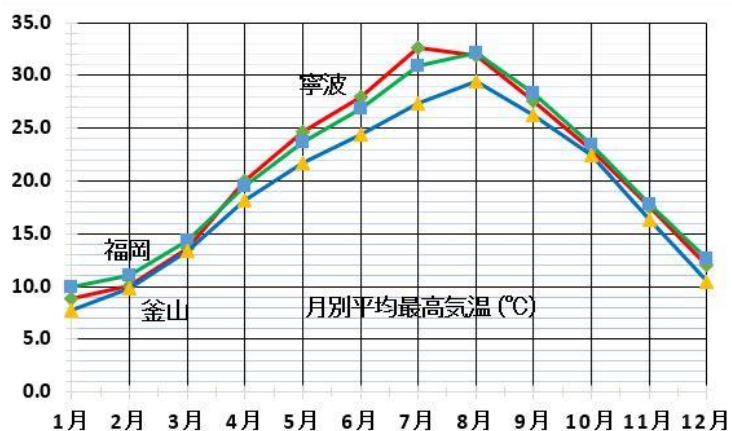
海流は、渡海を安全にするのに寄与し、おそらくすでに中国大陸にはあった帆をもつ船の航行を速くしただろう。また、小さくても構造船がすでにあり、移住者は食料と靱などに加えて生活用品や農具や家禽を



図Ⅱ5 杭州湾東から東流する海流と対馬海流 引用

積みこむことができたと考えてよいだろう。

それでは、朝鮮半島から日本へ渡る最適の港湾である釜山市と中国大陸の有力出発候補地である寧波市の気候を、九州北岸にあって古代に水田稲作の先進地であった福岡市の気候を比較することから始めよう。図Ⅱ6aと図Ⅱ6bに、三つの都市の月別平均最高・最低気温と月別降雨量を示す。気温が最も高くなる8月に釜山の平均最高気温が30℃



図Ⅱ6a 寧波・福岡・釜山の月別平均最高・最低気温

に達しないことが端的に事情を明かしている。釜山の平均最高気温を福岡と比較すると、稲がまだ弱い育苗～枝分かれまでの4・5・6月に 1.3°C ・ 2.0°C ・ 2.5°C 低く、幼穂形成・出穂・成熟期に当たる大事な7・8・9月に 3.6°C ・ 2.7°C ・ 2.0°C 低い。釜山の平均最低気温も、福岡と比較すれば、稲作期の4～9月に 1.3°C ・ 1.5°C ・ 2.0°C ・ 2.5°C ・ 1.6°C ・ 1.8°C 低い。図Ⅱ6を見ると、降雨量は8月に釜山の方が多いが、寧波との比較から分かるように、福岡が夏季に高温湿潤であることに変わりはない。

福岡が緯度のわりに気温が高いのは、夏季の太平洋高気圧の日本列



図Ⅱ6b 寧波・福岡・釜山の月別降雨量

島への張り出しと暖流である対馬海流が西日本の日本海沿岸を東北へ流れるからである。それに対し、表1で知られるように、釜山の稲作期の気温は、京城や青島の稲作期の気温とおおざっぱに同じ傾向を示す。稲作に関して朝鮮半島の南部でも青島とおおよそ同じ条件なのである。ただし、夏季の降雨量が京城や釜山は青島の2倍くらいあり、アワ・キビ栽培の定着を遅らせたかもしれない。しかし、北からのアワ・キビの伝来は稲よりもずいぶん前のことで、稲が朝鮮半島に伝来してきたころにはすでに定着していたアワ・キビとの競争にさらされた、と推定す

ることができる。そう考えれば、先ほど見たように朝鮮半島南半で稲が
アワ・キビにとって代わることが遅れた理由を理解できる。

平均気温 2℃の差が稲の作況にどれほどの影響を及ぼすかはすでに
見た。九州北岸の稲の生育条件が、海峡の北にある朝鮮半島南岸を上回
ることは明らかである。それに対し、図Ⅱ6a は、稲作期の福岡の気温
が寧波とよく似ていることを示し、稲が杭州湾沿岸域から来たら、九州
北岸は気候的に同じ生育条件で迎え入れることができた、と告げる。日
本列島へ稲がどこからきたかの従来の議論で、図Ⅱ6a の気温グラフが
示されていたなら推測は一変していただろう。南方渡來說が下火にな
って考古学者が朝鮮半島経由説一辺倒になることはなかっただろう。
第Ⅲ節でした議論を加えれば、九州北岸に伝来した稲作が朝鮮半島か
らではなく杭州湾の方から来たと考える方がはるかに整合的である。

図Ⅱ6a と図Ⅱ6b の気候グラフに、イネの DNA 鎖にある RM1 型 8 種
の議論を加えれば、九州北岸に来たイネの発進地が中国大陆にあった
とする実証的な根拠が二つそろうことになる。日本列島に来た RM1b 型
が中国大陆からだったとすれば、ここまで見てきた気候条件と図Ⅱ5 の
海流からして、出発地は杭州湾岸域あたりだったという見方が強く支
持される。さらに、RM1 型が形質に対して中立であるつまり気候差に
敏感ではないことからすると、冷温な朝鮮半島と比較して温暖な日本
列島との両方で栽培されている RM1a 型も、九州北岸へは杭州湾岸域
あたりから来た可能性がある。この考えが意味をもつことは、東北地方
の冷害のところで示そう。

九州北岸で始まった水田稲作は、板付遺跡が教えるように、かなり高
度な形態で始まったように思われる。その稲作技術はすぐに修得でき
るようなものではないノウハウを必要としたはずである。つまり、九州
北岸で始まった稲作は粳を運んできた人に依存していたと考えるのが

順当である。その人たちは稲作を基盤に生活していたはずで、生活には文化がともなうから稲作文化の痕跡があると考えなければいけない。稲作が朝鮮半島から流入したという考えは、無文土器などの生活用品に流入の痕跡が見られることを根拠にしている。たしかに九州北岸の生活用品は朝鮮半島の強い影響を受けているが、その生活用品とさらに生活文化が稲作と関連があるかどうかは問われなければならない。

稲作が杭州湾のような遠くから来たとすれば、頻繁な往来はできないから、生活用具が近くにある朝鮮半島系のものになるのは自然なことである。水田稲作をもたらした人は少数だっただろう。やってきた九州北岸には人数でまさる先住民がいたが、植民者ははじめ先住民が希薄な土地を見つけて生活しただろう、とわたしは考える。2020年の論考⁽³¹⁾は、——現在の考古学的知見からすると、日本列島での穀物栽培は山陰地方の初期突帯文（無文）土器段階で、北部九州ではこの時期にアワがみられ、弥生時代早期からイネ・アワ・キビが出そろい、その後はイネが主体となっていく——と書いている。稲がやってくるまで九州北岸の先住民はアワ・キビを主体とする生活をしていたと考えられる。藤尾慎一郎の概説書『日本の先史時代』⁽²⁵⁾も基本的に同様に考えている。ところが、秦嶺・淮河線に関して見たように、アワ・キビは降雨量の多すぎる湿潤な土地には向いていない。だから、九州北岸でも先住民は川の流域や湿地帯などの湿潤な土地を耕していなかった、と推測できる。植民者は、そういう湿潤な土地で水田を造成して稲を植えればよいのである。

初期の稲作民の水田開発は敵対的にならずにすんだのだろう。そして状況証拠は、その後も大きな衝突は起こらず、稲作民が先住民たちを巻きこんで水田稲作に進んだことを示す。日本列島西部の気候条件のもとで、稲の生産力がアワ・キビにまさったことが大きな要因だ、と考えられる。人数で劣る植民者たちは水田稲作を主導することで、稲作に関係する作業用具と文化を地域社会に浸透させることになっただろう。

そのとき、距離的に近い朝鮮半島との人と物の交流はそれまでのように続き、水田稲作に直接関係しない生活用品が多数の住民が使用していた朝鮮半島系のものになるのは自然なことである。

つけ足せば、造船と航海技術の進歩していた東地中海で文明度の高かったギリシア人がイタリアにまで植民都市を築いたほどでないとしても、杭州湾あたりの海人でもあった稲作民が九州北岸に来たのが一度きりだったと限定する必要はないだろう。生活が成り立つようになれば、九州北岸から故郷へ航海する者が出てもおかしくない。

稲がどこから来たかで問題になるのは、稲作に関して朝鮮半島系ではない作業・生活用具と文化が古代の日本列島にどの程度あったかである。前著⁽¹⁴⁾で論じてあるので、本書ではその要旨だけを述べよう。

まず鶺鴒を挙げることができる。鶺鴒と稲作とをひとつながりのものとするアイディアは可児著『鶺鴒』⁽³²⁾にある。中国南方の水郷地帯の水田稲作と鶺鴒とを複合的な生活文化すなわち「文化複合」と規定し、二つがセットで日本にもたらされたと推定する。鶺鴒の風習は、中国南部を中心として雲南省・ヴェトナム・インドに及び、台湾・沖縄・朝鮮になくて日本にある。鶺鴒と稲作の分布域は重なり、伝播の起源地が栽培稲と同じであると告げる（家禽のニワトリも）。鶺鴒が水田稲作に必須の水系で補助的な食糧調達的手段だった、という理解をもたらす。重要なのは、朝鮮半島では鶺鴒が行なわれなかったことである。鶺鴒は中国南方から台湾・沖縄を経由せずに海を渡って日本列島に来たということになるだろう（長良川の鶺鴒は皇室御用として行なわれてきた。稲作も宮中で象徴的な儀礼が行なわれる。古来の体制にとって稲作と鶺鴒は重要な文化の一部であったことが判る）。

日本にはお歯黒という身体装飾があり、明治初期に皇族・貴族にお歯黒禁止令が出されるまで保たれた（その風習が日本では古来の貴族層中心だったことは、水田稲作社会を主導した人々の風習だったことを

強く示唆する)。ヴェトナムの研究者が、これまでの関連する文献に目を通したうえで、——アジアにおけるお齒黒の範囲は、一部の少数民族を除き、北は日本、南はインドネシア、西は中国の広東省、広西省の南部、インド東南部、東はソロモン・マリアナ諸島である——と整理している⁽³³⁾（インターネットで調べると、雲南省やラオス・タイ・ミャンマーなども挙げてある）。もう一つ著作⁽³⁴⁾を引いて、——南方の黄色人種の大部分が歯牙黒染の風を有していたとうかがい知られる。ただ、大陸民の漢族・蒙古族・満州族・韓族・ギリヤーク族等にその風習がない——と記されている。お齒黒の分布の仕方もまた稲作・鵜飼の伝播域と重なるのである。お齒黒の発進地が珠江・インドシナ半島であった可能性が高い。重要なことは、お齒黒に関しても、朝鮮半島にはなかったことである。だからお齒黒も、鵜飼と同じように、稲といっしょに広西チワン族自治区や広東省などの南部から北上して、長江下流域から直接日本列島に伝来した蓋然性が高い。

九州北岸で始まった水田稲作はかなり高度な形態で始まったが、その時代のつまり弥生時代初期の遺跡の発掘調査は、それまでの縄文時代と明らかに異なる文化的な様相だけでなく、埋葬された人々の身体形質においても差異を示す。すると、稲をもちこんで水田稲作を始めた人々のことを抜きに弥生時代のことを語ることは許されない。稲作と鵜飼やお齒黒など南方の文化的要素をもちこんだのが中国大陆から渡ってきた植民者だとすれば、ここまで考えてきたように、中国大陆でも珠江流域から長江中下流域までの領域に住んでいた古代人に注目するのがよいだろう。

現代の中国では大多数の人々が自分は漢族だと登録し、たとえば珠江中流域を含む広西チワン族自治区の名称が示すように、漢族以外の民族は周縁部にしかない。しかし、初期国家の夏・殷・周の支配領域は黄河流域である。春秋・戦国時代になると「楚」が長江流域より北で

大きな領国を支配するようになって、その領域の漢化が進んだ。しかし初めは、北の淮河流域までの稲作地帯には稲を運んできた南方系の人々がいたと考えられる。秦・漢・魏・晋になっても中心領域の支配層から、長江流域とその南は異民族の領域と見なされた。彼らは百越^{ひゃくえつ}と呼ばれたから地域ごとに差異があったのだろう。春秋時代に杭州南岸域^{かいけい}の会稽(紹興)から出て楚に侵入して覇をとなえた国は「越」^{えつ}と呼ばれたが、越の人々は百越を代表するような人々と見られていたとしてよいだろう。

上での考察は九州北岸に粳^{もみ}を運んで水田稲作を始めたのはその会稽のある杭州湾周辺の人々だろうという推定に導いたが、彼らは百越に属する人々ということになる。栽培稲の起源地珠江中流域とその下流域から稲と複合文化を携えて北上した人々の血を濃く引いていたことだろう。さらに、九州北岸の稲作開始が BC900 年代とすると、越が建国する 300 年くらい前ということになる。九州北岸に粳を携えてきた人々を、あいまいに百越と呼ぶよりもむしろ“越”から来たと言った方が実状をよく表現するかもしれない。越の人々は、河姆渡遺跡のころから水田稲作社会の培った文化を共有していたはずである。するとすぐ、長江中下流域が豊^{とよ}ア^あシ^し原^{はら}と呼ぶことのできる広大な水郷地帯で、鵜飼の本場だということに考えが向かう。竹で組んだいかだに乗る素朴な珠江流域の鵜飼は、長江流域にもたらされたということである。この推移は、そこからさらに日本列島へ稲とともに鵜飼が来たという見方を納得させる力をもつ、とわたしは思う。

さらにもう一つ、お齒黒と親縁関係にある身体装飾がある。その入れ墨は倭国と杭州湾岸域とを結びつける文化事象だという認識が、3 世紀の同時代史である『三国志』「東夷伝」に語られている。馬韓のところで文身^{ぶんしん}が時々見られると書き、辰韓では男女の髪型がともに倭に近いとしたうえで文身のことを語るが、続く倭国のところで「男子はみな

げいめんぶんしん

黥面文身」という書き方をして、入れ墨が倭にとりわけ特徴的な風習だと認識していることを示す。その文身を会稽地域でのいわれと結びつけて共通する風習とし、倭国と杭州湾岸域とのつながりを示唆している。『三国志』の指摘は倭人の文化に対する同時代人の客観的な認識を示している。それを軽んじてはいけない。文身も、南方から水稻を携えて長江流域へ北上した百越の人々がお齒黒といっしょにもたらした、と考えることができる。

『三国志』は、その時代に朝鮮半島南端の沿海部を倭地と書いている。人と文化は、海峡を北から南へ移動しただけでなく、南から北へも渡ったと考えるのが自然だろう。朝鮮半島南部の入れ墨が九州から海峡を渡って波及した可能性がある。というのは、中国大陸の北部では入れ墨を蛮族の風習とする見方があって（入れ墨は刑罰に用いられた）、やはり北方の風習ではないと思われていた。朝鮮半島でもそうだった可能性が高い。

高床式住居も南方のものである。高床式住居は東南アジアを中心として分布し、古代には中国の長江流域までの住居がそうだった^(35,36)ことが、水田稲作社会の住宅様式であることを示す。ただ、日本列島の人々がそういう住居に住むようになったのが、一般に九州北岸で稲作を始めたころよりもあとと見なされているので、断定しにくい。しかし、冷温な朝鮮半島では高床式住居とは異なるオンドルのようなものが普及したが、日本列島では冬に寒い東北地方以北でも高床式住居に住む。その歴史を整合的に説明する研究をまちたい。

中国雲南省の夏は涼しいが、そこにも高床式住居がある。雲南には、水田・鵜飼・お齒黒・入れ墨・高床式住居がみなそろっている。生活用具にも日本と似たものがあり、文化的なつながりを示唆する。そういうわけで、雲南・中国南部・長江下流域・日本を結んで大きな弧をなす領域を一つの文化圏と見る論が提唱されたのである。その文化論は、稲の

栽培が珠江中流域で始まったという発見をとり入れて修正すれば、復活することができるだろう。

参考文献

- (1) 谷川修『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』, 白江庵書房, 2021 年.
- (2) 小川光三『大和の原像—知られざる古代太陽の道』, 大和書房, 1985 年.
- (3) 水谷慶一『知られざる古代』, 講談社現代新書, 1980 年.
- (4) 杉本智彦『カシミール 3D GPS 応用編』, 実業之日本社, 2014 年,
最新版ソフトウェアはインターネット上のホームページ.
- (5) 谷川修 電子書籍『日本神話の起源と変遷』, 白江庵書房, 2022 年.
- (6) 小林健彦「新羅国の文武王と倭国」, 新潟産業大学経済学部紀要, 第 43 号,
2014 年.
- (7) 服部英二『転生する文明』, 藤原書店, 2019 年.
- (8) 谷川修 <http://hakkooan.net/>蝶の雑記帳, 「85 ボロボドゥール寺院の太陽の道」, 2019 年.
- (9) Xuehui Huang, Nori Kurata, *et al.* A map of rice genome variation reveals the origin of cultivated rice, *Nature* 490 (2012), pp.497-501.
- (10) 倉田のり, 久保貴彦 <http://first.lifesciencedb.jp/archives/> 6065, 2012.
- (11) 井澤毅「遺伝子の変化から見たイネの起源」, 日本醸造協会誌, 112 巻 1 号, 2017 年.
- (12) Shinichiro Honda ホームページ「アワ, キビの起源」, 2020 年.
- (13) 谷川修 <http://hakkooan.net/>蝶の雑記帳, 「38 鶺鴒と稲作の伝来」, 「38b 稲作と鶺鴒をもたらした人々のお歯黒」, 2016 年.
- (14) 谷川修 電子書籍『稲はどこから来たか 気候地理学的な推論』, 白江庵書房, 2022 年.
- (15) Shinichiro Honda ホームページ「イネの起源 1」, 「イネの起源 2」, 2018 年.
- (16) S. A. Marcott *et al.* A Reconstruction of Regional and Global Temperature for the Past 11300 Years」, *Science* 399 (2013), pp.1198-1201.
- (17) Wikipedia「海水準変動」, <https://ja.wikipedia.org/wiki/海水準変動>
- (18) 近藤純正「1993 年の大冷夏」, 天気(日本気象学会), 41 8, 1994 年.
- (19) J. L. バック, 「Land Utilization in China」, 1937年.

考え方だけの孫引き。

- (20) goo ブログ 地理講義 32 中国の農業 農業地図, 2011 年.
- (21) <https://j2.wikipedia.org/wiki/ケッペンの気候区分>
- (22) 宮本一夫ほか「東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究」, 九州大学学術情報リポジトリ.
- (23) 原宗子「古代黄河流域の水稲作地点」, 流通経済大学 創立五十周年記念論文集 1, 2016 年.
- (24) Robbeets M., Bouckaert, R., Conte, M. *et al.* Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages, *Nature* 599 (2021), pp.616-621.
- (25) 藤尾慎一郎『日本の先史時代』, 中公新書, 2021 年.
- (26) 李亨源「韓半島の初期青銅器文化と初期弥生文化」,
(日本の)国立歴史民俗博物館研究報告 第185集, 2014年.
- (27) 後藤直「朝鮮半島原始時代農耕集落の立地」, 第四紀研究33(5), 1994年.
- (28) Yim Yang-Jai & Kira T., 日本生態学会誌 1975年, (図だけの孫引き).
- (29) 佐藤洋一郎『稲の日本史』, 角川ソフィア文庫, 2018 年.
概略を「JAICAF お米のはなし 12, 14」で知ることができる.
- (30) 国際気象海洋株式会社ホームページ.
- (31) 中村大介「弥生時代の開始：朝鮮半島から日本列島へ」, かながわの遺跡展特別講演第2回.
- (32) 可児弘明『鵜飼』, 中公新書, 1966 年.
- (33) ファン ハイ リン 「お歯黒文化圏に関する試論」, シリーズ ベトナムシンポジウム 2013, 2013 年.
- (34) 原三正『お歯黒の研究』, 人間の科学新社, 2006 年.
- (35) 周達生 「中国の高床式住居」, 国立民族学博物館研究報告,
巻11 4号, 1987年.
- (36) 浅川滋男 「中国の民家・住居史研究」, [https://www.jstage. go.jp/ article](https://www.jstage.go.jp/article).

2024 年 7 月大暑

海蝶 谷川修

